



櫻  
醒  
紀  
談



卷

5  
73  
1



蒙

山崎美成編輯



御

提醒紀談

免

江都

海棠菴藏版



提醒紀談序



論事解理。明白純粹。醇乎  
不雜者。書生之學也。而往  
師傳不心。受錯傳謬。童習  
白絲。卒之不能得其正。或  
陷於荆棘者。亦不為少也。



余父執山崎先生。深憂其  
如此。故事必提要。理必鉤  
玄。一歸其至當而後止。先  
生博覽多識。能通倭漢古  
今典故。其於國史。尤有未  
發之說。論經之餘暇。隨筆

雜著。記其見聞者居多。而  
恐零帖單葉。散已湮滅。遂  
輯為冊子。得二十五卷。其  
事多係慶元以來。嘉言善  
行。奇事異聞。其文國字成  
編。名曰提醒紀談。亦欲使

讀者。脱荆棘之中。而趨明  
 白純粹之途。嗚呼。是提其  
 耳醒其目也。唐成春王正  
 月。雪江開弘道撰并書。



提醍紀談卷一目錄

君子國  
 神祖北御教諭  
 誓約  
 豐公の民と使  
 五百羅漢北石像  
 僧安覺が強記  
 菅神渡唐の辨  
 武功より合別勝る  
 岡本半助  
 宋版の経跋

名器と鬻て民を救  
 觀世音の利益  
 風流祭  
 僧残夢  
 菅公筑紫の詠詩  
 阿房掃部  
 謠曲此作者  
 慈光寺



稱するも最きもあざり孔子の里ハ仁と美ニ居持で仁子居  
すんハ馬知と信んと曰了今孝子ハ此君子國子居るとある  
とや仁子居とも謂べしうふ邦小居んうふ自勉ウ仁我為  
て君子國の名子うあふやうすすべきをぞや又あふ子吾邦  
また風俗乃博美あるのこあは折風土山川の美も亦萬  
國子すやうと七美あり今これ月とこ子迷ん先一子時侯  
正しく二子穀食美く三小蓋服信り四子民此風俗博く五小  
法度嚴く六小外より侮る事あり七小文字子通ずさまハ世人  
くる國子居ると七幸ありといふる一貝原益軒の語

自娛  
集  
神祖此御教諭

○東照宮乃宣く大廈千間夜卧八尺良田萬頃日食二升とく  
子孝愛万孝愛此家と云ちくも卧すこころハ一孝ありおと  
前子ハ珍とつるぬるとこども食すこころを口ふあふその  
二三持するは天下のまあくもつあるこころも唯一飯あり  
外も用あしあうもふ何ぞや民と苦めひさす子牙此榮耀と  
好之令限とくも人牙子代る家人の必ひつぎるハ愚あふ事れ  
聖かくの如く存れええさると唐の左宗ハ我股とさきく我腹子  
食すも子た人らまてり民ハよく我こ一體のこれあるゆゑ不民  
とむさかりて財寶と云聖集る時民をわきまれきて君はか  
あり股の肉と食しく腹と善ふとんとも股の肉つきぬまは我牙  
はぶる如くとのさふ了訓遺これや神明の託言聖人此確言

小をまさりつゝつと有らざるこそおぼやき大度千間此語を具  
原の和津古諺を載せり

名善と驚く民を救

○細川忠興子ハ父此幽るも勝アる移状多う々々浮子豊  
小倉北城まゝ一歳領分大子早魁一向子作毛  
く農民ごも餓死子及んらる此昔役人ごもよ言訴ひさ  
ああらうての饑のう子あはる本年此手毒もあつとさりと  
公本ご忠興大小痛ぢるる尋常の事あはる移届く  
おぼこそらうて幽高ありお侍もまゝ名物此茶番と残ら  
かを屋小持也京都子つらまゝ此品質物子入合子借用火  
是此難を傳ぎやゝとせんと夫らとの事あはるをあらう

初まぐまぐはまをよろしきお言と搜して残らば賣拂ひ  
一とのとあき急ぎ上京つゝいお望みのと此多くととごも名  
高きあゝあて天下の珍番おれお好難此のととごも名  
表向きあゝ買求ん子ハあらうとて所司代板倉氏へ伺ひ  
小周防中聞きてその茶番此由緒ハ何れあとのとて當時麻  
の細川家お持ちも賣拂おれとあるとてお別條これおき事  
ありお望の若ハ勝手お買子買らるゝ代合此事お漸く上  
るハ我等も一晩すア名の聞およびるるらうあま今まで  
足ざりし小吉のてと中されしお意おを氣きあゝとて有極  
あるものご色幸ひて求めらるるその合子とつとご大坂子持  
けき米麦とをい何子よろは食料小ふるんきおと残合子

限り置とりの人船あり小倉へ廻し残らず領中へ分けあへし  
由名大勢北者ども飢と助りりあはれりこのと諸國子うれお  
くやゆはしと誠子國化せし人の本ありと今も皆この  
忠興の多りと賞美しとるるとるはるの仁政此餘愛あや加藤  
肥後吉比呂と跡と二死人子賜りり草これ子ありて  
子古宣化天皇の勅小黄金萬貫ありりも飢と療すつら白  
五千箱も何ぞと冷と救らんやと宣つとつととと誠不  
食ハ天下の本ありりれを古昔祈年祭と朝庭子豊年と  
祈るの神事ありりれ耕すに勉めされハ困倉盈すつて  
を將相の位ありりとのも彊くは功烈と成すとあはれあま  
や萬國彊兵此道も此ハ外ありりつとつと

誓約

○大久保越中もをどり荒之かと申せし銀林の家臣子御舟  
られし誓詞の附所跡は遠ひ万一逆意等の名臣立あは  
まある所を子言上におよぶつきこある一條子とつとつと  
此義ハ御儀は難しとおもはるるは君の非と申さんと  
わあはくあまうとんと道子遠くは御所跡ありハ幾なるも  
御所中上その上用ひあはれりと許人うんとを存も  
よろす左へつと此一條ハ御所中すありとて誓約せしとるよ

明良世  
範續編  
按小臣うんととのうれハかくあまうとんと昔の三代お恩  
あまうとんと世とを長しと今ハうと世福此臣あり農をも



つとあす勤仕の事とする世とありてを誅めて退くべきも  
毛あつさるや

觀世音の利益

○江戸室町此邊は踊場屋四所を博くこのあり或付金子百  
両拾ひたり亦不持取り老母子を乞ふやうに此金今日  
路子落しありその落したる心の半を察すまじ不便の  
とあり何とぞ落したる人へもつうたう拾ひ来れりあ  
し尋ねてきてさうもあつてせんと言ふは老母これとて  
それハあき春一してこそあれ年老る我らが分別も及ひ難  
し弥勒寺へ祈り候持子お談よとされもこそさうもさうやう  
て弥勒寺へ参りてあつてのありこの誅りもまはれ尚も落し

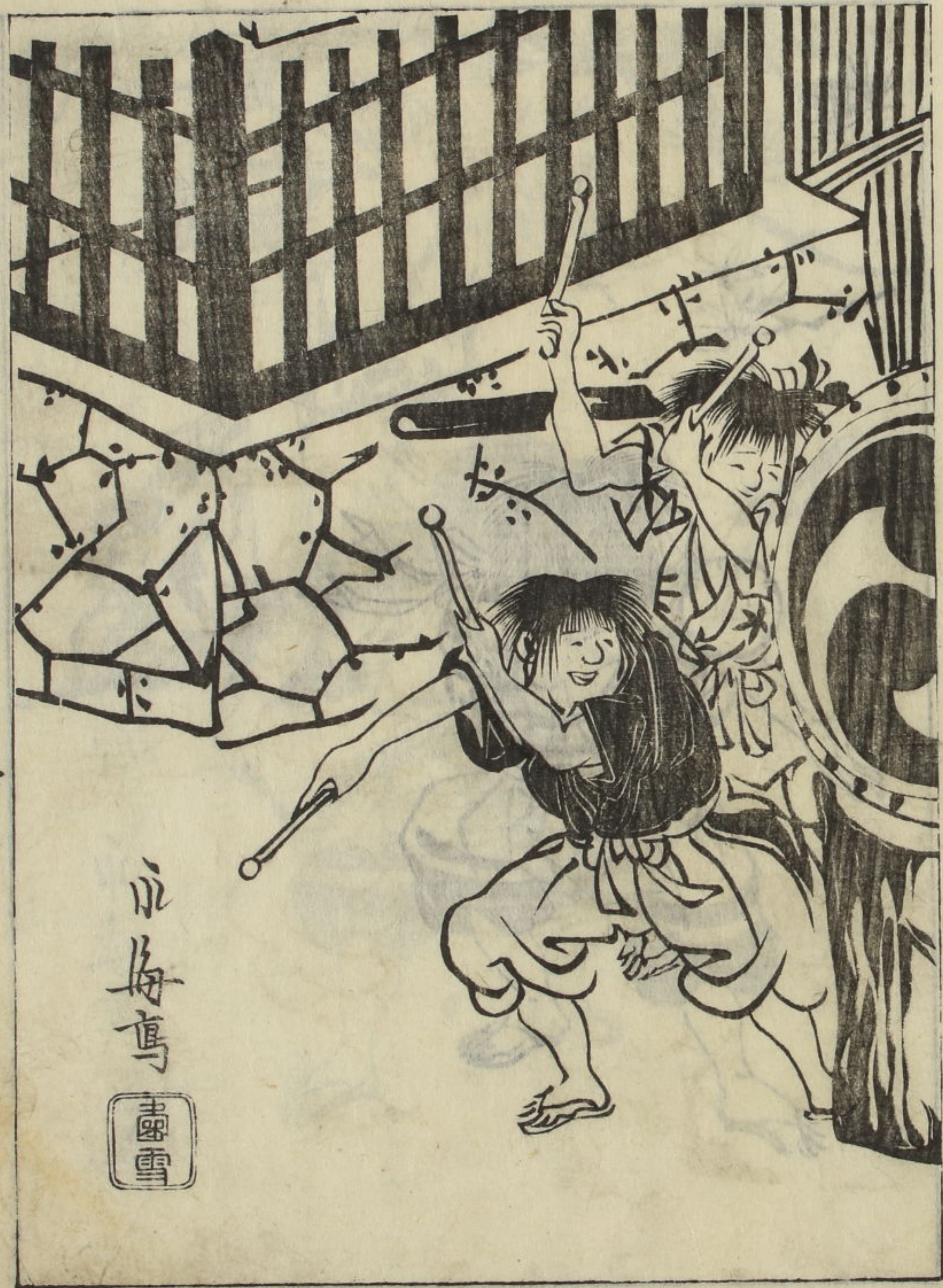
たるものど尋ねべき乃か〜と云々然るに此金と貴僧小あつけ  
と云々〜祈りもこれとれこれと云々皆これに指し候いふはせん  
と云ひ候〜ひ〜お返ぬ彼弥勒寺此住持浅草あるある方へ  
齋子ある乃めて年のころ二十四五歳なり此男髪を亂し去り  
初く小出違ひ〜和尚不義子おひ候者〜追ひけさせ  
い〜ある子細めて去り初く〜尋ねるまは彼を〜い〜やう私  
を傳馬所〜を相屋何業か子代めでけが京都へ移せよつら  
ちん金子百あるつら路子落し〜主人の方へ致すまやう  
と云くさてい尋ねて〜もあつてせんすべく浅草觀世  
音子初我〜七日訪して大意の力と頼〜んより外不  
〜と云ひて目と糸訪〜今日ハ結願〜糸訪〜んありと





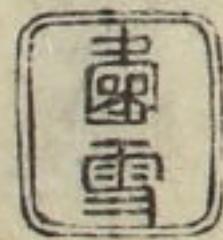






一ノ十

水島寫





一ノ十一

水母寫



水母寫



五百羅漢の石像

○予西遊セし時、バジルの子豊前國下毛郡迹田村に石像の五百羅漢を拜  
せんとその地子に考周堂山羅漢寺といふ精舎あり老の坂とい  
嶮しき坂と登ふ又手書ありといふことあり石像と渡るこ乃橋  
天造ありて危くさて巖のまきあり五百羅漢と彫りて外に四  
天王八大龍王日天子月天子梵天帝釋普賢文殊をどにか石像  
あり本堂も巖をきり用て斬りて造りて天井も壁も皆  
巖のまきをきりて造りてあり奇といふ僧絶海が舍利塔の跡  
あり云豊前州羅漢寺鎮西勝地而鐘台馬之秀延文五年春  
釋服覚始入石室而居遂成寶坊未幾有僧建順師山石起伏  
壞奇手彫羅漢像五百軀儀貌魁梧靈祥荐獻矣  
菴堅とあり

これあり此山の起立界知るべし

僧残夢

○天正四年三月二十九日陸奥國會津ある寶相寺に二十  
三世に住僧残夢曾らうう秋風道主と号す此日牌と設け自  
名號と書くくさぐさのこれ諺りするをいふ人多く誇り以家  
のしき頌と説て云隨在無間立逆聞雷鳴下晴驢死眼豁開と  
云く夢と擲る棺入り遷化して寂と示す謚して挑林契悟  
禪師といふ土人傳へて云殘夢の人とあり幸子風敷の如く人  
達やぐもいささう下るとあり檀那子諺ひ招かれて多し一日小  
幾度も齋しつきて食す又幾日もその食をばくくを飢たふ  
顔色とる衣の契とて着る年と経て改めると子一人あり



強く衣と賜り着入す子北ハ舊衣の熾氣を捨ひて施しあて  
へぬ或ハ貧者と乞くも着る衣とも自脱しこれと與ふは平  
く源平の軍物とて与せり又同國岩城郡に在りては若  
まある所やお違ふとのありしふ互に曾我夜討の事とて  
語りその他往昔の事残れども子悦も親しく思ふとの如  
一人の年齒と同く百五十歳と對みあへて語りしは  
却て年と忘れしとて語りしは世人ハ義経の臣幸陸房ありと  
語りしや 會津舊 幸陸房  
按子小瀬復蕃云三十年前より以前小加洲に殘月とては千歳  
なり此老僧ありて犀川の東西へ流まると云く昔をこの水  
南北へ流北より南へ流まらずきをふがれしと云ふ事あり

まゝく春日山といふと云く 此山にて義経と畠山が酒宴せしと  
ころありつれ安宅の園より跡を追ひおのづかぬのこは山にて酒  
宴せしき昔お語りし判官及十二人の傳り山伏あり通ら  
しといふことをあはれともなきとありその所付とて云はれし  
百五十人たりし人救ありありと云く此殘月といふ所の傳  
居とよく尋ねるが趣の田中といふ宿の宿あり一室をつ  
きて小松原宗雷といふ六十歳あり此をの同宿してあり穀  
絶く食をば松脇を焼けて服料す二人ともおひるるものとも  
あはれず誰しやともあはれし傳人といふハ殘月の幸陸房海尊とい  
小松原を龜井と神といひしこのありと云昔の事とて向へ  
つす地のと此ともその意とゆき義経記といふ冊子を讀み

こありかくありと之がゆほずしここの冊子小ぶえしハ非あり  
その事ハうくこそありつををといひくおるえんその時代の事  
ごとのいひ出すとありとすうお脂と焼るはハ本草子見  
えしところありのこつ遠さんといふ老談一ありの子これ残る  
残月が二事ハ僧の名も似しうれを定めて同人ありて今  
併せ記して是聞と記むといふ

僧安覚が強記

○筑前國宗像郡の産まじはむし色定坊といふものあり學丈の  
たの末しはりて名を安覚と号せり末子居ることおよそ十年  
あり一切経のころず暗誦せんといふ辛苦志すこと羅大經  
といふ人の安覚は達々といふ此に一切経をのちや奉て記腹

いたりこそ異夜の法すくそ此志といふと苦く退  
轉せざること此にありと感しと鶴末玉露小記しり歸  
國より文治元年二月十九日より手づつ暗記の由書寫し  
七のめ承元二年二月十六日書平ぬその料紙十をこふその  
以乃源平諸將ありひの紙ありひを二紙助成せり紙背に  
そ此姓名と書付てありといふ此終今猶存す平久く病瘡  
一連三月琴と弾する僧より此安覚が真蹟数紙とほ  
り手製して藏奉せり

菅公筑紫此詠詩

○天満宮の神廟地と安樂寺といふ天原山と号す則菅公祠と  
築しとろあり菅公の神社安樂寺に在りしとろ子建し

故子孫まで色天満宮と安樂寺とつゝ昔公ハ徳日命の孫高  
菅原是善卿の子ありて諱ハ道真字を云と云る清和天  
皇の御時あり對策及第して陽成光孝宇多醍醐の五帝ハ  
仕つゝ官ハ右大臣子升里百官とすハ萬機と司り此公ハ  
徳子比つき字文の具と云るハおとをふりしと云時平大臣の護  
言不依て延喜元年正月二十五日右大臣の官職と止められ  
右宰相權帥子左遷せらるるよ一宣旨と下されたるやして二  
月朔日終子都て出て此紫子赴るやと云小宰相府子為せらる  
て懐と述へと云小詩子

離家三四月落涙涙百千行萬事皆如夢時々仰彼蒼  
こあり西府も人多くまどと云くくとのと宣ふつき人も

々本が常子一室の内子のと日と送りと云ふ都府接も御覽  
トやられらるまで少く登臨したまふともあく觀音寺を公  
ども遊觀とくしむるハある時不出門と云る題あり律詩と作  
里ありその對句子

都府接纜看瓦色 觀音寺唯聽鐘聲

と云る唐の白樂天が遺愛寺鐘款批聽香爐峯雪撥簾看こ  
つゝ詩も増しぬつきと昔の博士をヤ々々滿海國此使者裴  
文籍も菅公の作と云く白樂天子似らると云る延喜  
三年太宰府あり例ありハ悩と云るやと云ひ終子二月二十五日  
冲年五十九子て薨せしむる右宰相府子をき四堂の色不  
里をくんとしと云ふ輜車たちまち途中子止まりと云動らざ

まがやぐをこそ神墓所こそ今神廟の地これあり  
土予弱冠の頃西遊せし時右奉侍子より観音寺に詣りて此  
寺を齊明帝此冥福を俟せん為す天智帝に創建せしといふ  
といふ鐘もあれど當時の事あり又都府接の舊趾と尋ねるふ  
今ハ之を礎五十むら残りて古瓦の缺るが此彼子ありとある  
のこり此菅公の瓦色と觀せしと記せさせし古もその出られて一  
二枚と拾ひありつ今務机上に愛覧せし

菅公渡唐の辨

○ある諸侯の林羅山先生小菅丞相の貴と素知られし先  
生ありしと定む衣冠劔佩儼然たる像ありんとす此幅と緒  
てこそとるる子状貌伊蒲寒桑門此境の如きとあるといふ

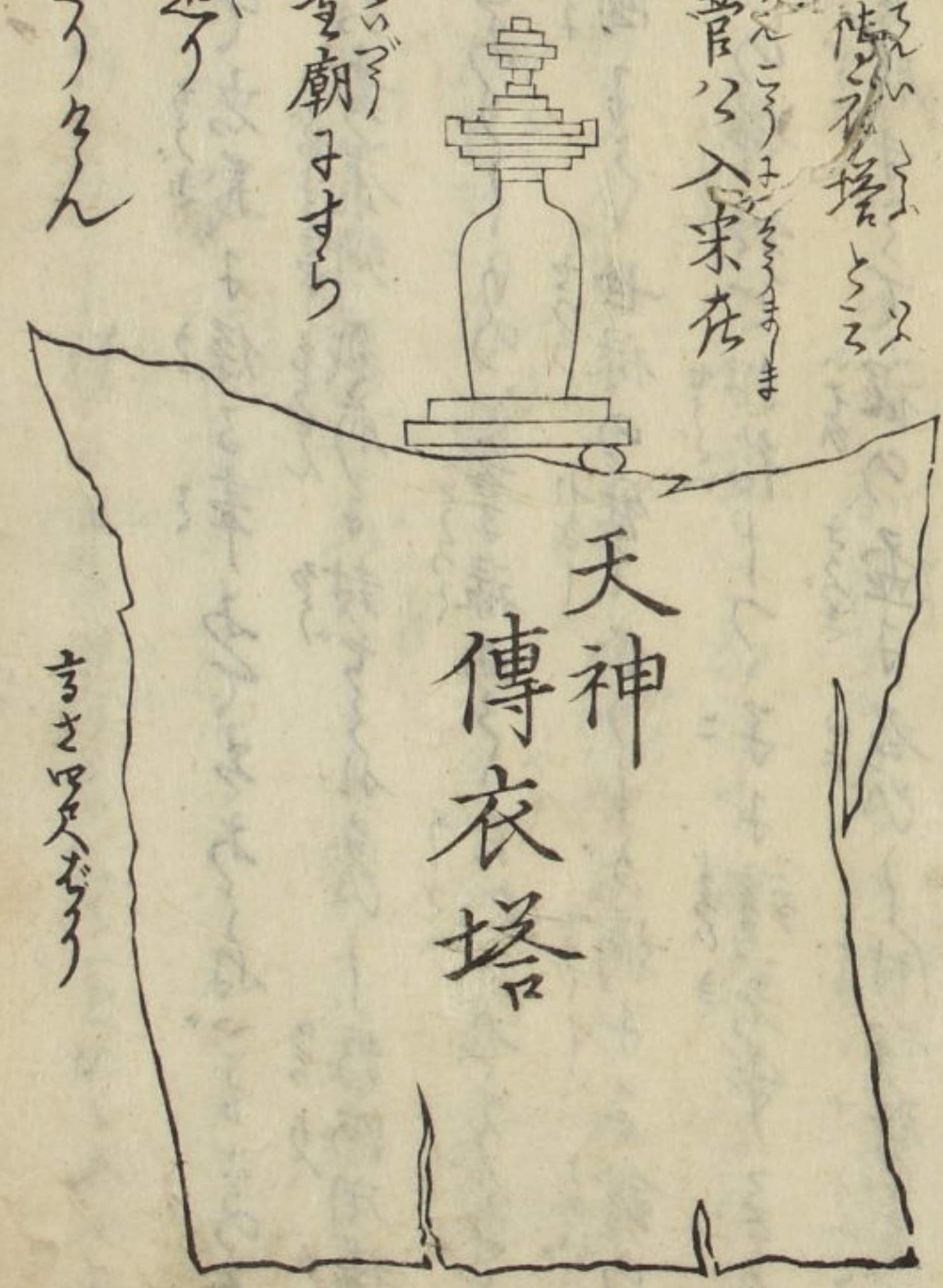
るそあり吾曾く佛者れいよと聴らふことあり昔辨園といふ  
法師の弟子菅神あり弟子と云んとて傳ひし子園云我師  
在せりといふるその翌朝ありありの衣中幅梅を我  
簪こし衣袋と挿し且告げて云我來子封きて師範が祿室  
不入りといふとあり爾來浮屠者あれといひ口實とす世人も  
亦實事とせり今此圖を思ふ子之状貌あり人嗚呼異端の  
書とあり人と惑をするたよりこれあり已に伊勢の右神宮を  
吾邦の宗廟あると毘盧遮那此初基子告ぐと云又斥岡山  
の餓人も益壽時の隠逸此人あるべきと善提在唐の聖僧也  
子子遇りといふるわがわが事蹟奉る不違わくは之をこそ浮  
屠奉と好むの所為ありて幸合附會してその姦を神ありそ

の要と截一邪と違く一術と信る世人あまを察せずの骨  
公を吾邦人抱此賢明雄偉あまを人々固よりこゝ敵ひきる  
とんく心子これと慕ひ奉り託きて世子たり國子鳴玉遂子  
祚と誣るもあまをこゝの如く一所謂佛者のうくく自吾信不  
附とを求めずとつとあまをわくまを吾も亦辨國が偽愛と  
知らざるんや抑又自名け自託一自利一自利するはたあま  
安り子説と為らあまを人々子何の措けりてこの言と發すふ  
や對て云吾人の心子據り言のこ心ハ神明の舍り神ハ聰  
明正直の臺あるその如く古今とあまをまをまをまをまを  
固くあまをこゝろあり彼もあまを人あり山固く然るの心を  
うんや自私自利ハ蔽とれて識ざるふこそ况昔神とや

この心子固くするあまをんかの聖人後起を待く終る  
何ぞ人乃信すると信せざることを極人や神を則吾る此必範  
老れ神子參せざるを知り神と一々あまを名と據りしむ  
ふとく一吾あまを辨せざることを得るあまを人あまを然るを  
此國とバ發すづき一國子あり畫くこまの言と失ひ誤り  
とあまをあり五鬚鬚之れ位子骨子あまをのあまも小面美鬚  
まを韓熙載のこ且君子謂らく小教を一毛と差一を所  
その人子あまをの剗や一花圖とや誠子發すづき然れども古  
人已小石と云木と刻こあまを不事あまをときを神こ不棲ま  
あまをこれ理字子あまをず神の求めあまを小亭一誠あるも  
すまを聖ハ木と鑽て火となるか如く在らざるこころあまを

菅神より異端と排斥すべしと云ふも今この像あるときを  
 神より寓せりと云ふべし 羅山先  
 按ふこの辨已子盡せりと云ふ阿とくも人授因子と云ふこと  
 ハ菅神入宋授衣記この書羣書類後の中子存りその  
 考未子薩之福昌禅刹寂庵之日 岩石之罅隙得此像記云  
 このありに記や入宋授衣の記に初めあり人長親卿西聖  
 記ふも是と云ふは難波津小岫やこの花と詠せし  
 百篇の五仁は像ありと云ふこと又を林加瑤の像あら  
 んを云ふは説を好事に附會しと云ふ辨と待すしては  
 妄と知るべしと云ふ蓋簪録小四明の方伯初が日本此僧塔  
 聖が菅相渡唐此賞と記しと云ふ此事の虚誕と云ふ辨

と待すとして 自在陰陽不測神感天忠義聖朝臣浪傳經  
 島傳衣辨香渡梅花一點春  
 文化乙亥の歳予西遊して筑前の  
 右掌府小岫に宮北前あり  
 お深川の石より五階の塔と云ふ  
 石の塔ありそを菅公入宋在  
 考く傳ふ  
 衣辨と云ふは  
 あつと云ふは 聖廟子すら  
 つの世子と誰と造る



一ノ六

言さすはなる

阿用掃部

○越前の士ありて忠義子係る事少くもあはれごもあはれ  
これ士風と名づるべきは秀康卿越前子封せしれまの好阿用掃  
部とて武功は著まありしものと尊祿ありて名抱らるるものと  
拍伊勢とてこれも國もく世祿の歴ありしが嫡子子鏝の  
著初めさせらるるふりの掃部と招待しつゝ子子鏝著するごと  
と著るるさるるさるる饗服すて祝の盃子及びし時伊勢と今  
日を愚息が痘の著初ありていまは武才の所武功は事物  
誇りけり彼小治世せしめては小掃部や葉が身の上子  
さるる水も子一やつき程の武功を覚えやさるるさるる  
此等も黙止せしめしる葉一生の中子武者振の事

おふ士と一人又ふき今その事と名をいやすは江  
州志津嶽の戦小暮方子葉一葉余吾此湖のりつと引  
けり小敵とおありてうらうらうと詞をけり夜馬を引返  
しけり今朝よりうせぎいどもあき敵子逢やさるる所人  
體と名づけ幸とて存ぞと不祥かたり相争子あり  
やづきてとて名をよみたり也名をこれこそあとも名をむこころふ  
て少くして互子馬子のりも子一すゞ子鏝とあをせんとう  
りつとこれ人志ぞと名づけけり今朝より雑多と多く突崩し  
ゆめく鏝もこれてけり鏝とあはれひて水お手子ありけりんご  
余吾の湖子鏝とありひつゝ二三遍あはれひつゝさるるはさるる突あ  
ひつゝ名も勝負ありし程も日も暮をもてさるるあやめ

毛又えんをりぬるの附ありさより最早一孔までぬくはぬい  
と取中づーぬ名こそ形り交けへ葉を青木新を場と申しこの  
あまゆいとて葉を名をも形りゆく此好又陣取ぬくお合はる  
たがひ子今子ハウツリ中まぐくはてー又味方あてはつた  
まふく入魂しつーはーさうばいさうまーがこ孔程  
幸ある武士とまつひまえはるすいさありさてはみやと結  
まなる子その辰伊勢がわとへん安く出入する青木方高と  
いふ浪士ありその日も事りさう勝手子居さうーが此物語と  
さて勝手あまふり出つ掃部子向ひてさてこ毛に今うの毛  
どろろ承り今又昔とどひいさう涙を落しさうこそゆへに此附  
のにお手子ありー青木新を場はさうーあさう我事あては

うくやぢろろふさうほうきさる事小おむづくはさてその時  
雙方の禮此威一馬の毛色と一いひさうか一も遠をさうらま  
お掃部おさうきつささうくさうらふあひいて奉望子ゆさう  
手前子ありー石並と方高子さう一是とあるー少とて腰のさき  
指とさうて引さるさうら方高が名國中子さうくあまう不  
さふ秀康々の耳子も達せーさう掃部と同し録あて呂出さ  
まらるとさう好一伯辰筑紫へ左遷の時掃部をいさありん  
うあさす方高も先録あさう如あへ振うはるれありさう子仕へ  
て子孫お録しさ今ふあり青木が武者少りの兄事あさう  
さうさうあさう所用は彼が事とどい出さう名のり合てさうこび  
ー又伊勢が子此禮の善初子掃部と振さう子此あさう子さう



武功のお語りをして... 何れもさうたる事... 武功の代より... 夜曾我十郎... 年此父の誓...

武功より分別勝るゝ之扱

島原陣の尉大忠とあり... 彼軍此軍の誤り... 番に乗入り... 一城へ...

と雙方とも不用ひず... ありまうり出... 二番とやく... 頼朝の代より... 夜曾我十郎... 年此父の誓...

里々々々と云ふ祖父伊藤藤祐親の敵あれハ逆仕奉ふれ朝と一  
刀恨こゆさんごまの所とさく切て入る殺多の者子手  
質せぬ時宗ハ思ひて以所へ入り々々子頼朝も以腹巻と云れ  
長刀横へ入り出させぬふと云ふ大友の一法師ヤムおま  
うぢりりのお事子出あるえ々々々人どバヤクク々々々  
つー内子入らせんとおしぬゆき事然もこころ子祐成とハ新  
田四郎忠常ハ討た時宗と云五郎九搦め捕り々々世子祐成  
兄弟と云鬼神のやう子あつーこのと討た々々々一人ハ何の所  
褒美あり々々々々々々々々々々一法師ハよき誅と云々々々  
大隅薩摩と賜さる々々々々々々々々々々此事今の代までもがれ子け  
まおのくもささぐ以存ハあるべ々々々ハ武勇の働きハ何の

やくあえさず分別口才を用おえと云えさるる此用子えさる  
武勇の争ひせんゆハ能分別と云夫のされハ分別といふわ  
今五人討果々子を福を受る主人の用あえんと云ひハ福  
子ハありゆ々々々や自己の勢りよその才と失ひ玉を捨ぬん  
と云々々分別あえ々々私とややく互子相談ハ云々何事々  
あえん時子君の言前あ々一二と争ひ々々ふ証據と見せてと  
まもれ玉を指々々あれよごんを夫子つきて中おのく々々り  
扱ひ々々々々々々々々々々長お諍り子怒りもさけんもあつまりあ  
程りのなきもあ々々ハ互ふ玉と云々々々々々々々々々主人あ  
まを穿れ々々非妙ある扱ひありとて加増と賜さるハれを傍  
軍子向いて云々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々



酒りく批判あるが、とてや、了簡のつを率、智のまどを甘と  
おく、くもあらぬとあり、何れをこれ、了簡つきくも敵乃  
中へが一人すつと初、く流る、弓とあると、怒れぬ勇あく、  
てあらず、何れを此勇ありてもその了簡及む、はるの分、子  
し、く捨て、悔、く、あられを、智、く、勇、く、さ、く、て、い、あ、く、ぬ、と、あり  
智者不惑の語、此、こ、こ、ろ、子、を、合、ぬ、と、此、や、う、子、お、ひ、ひ、が  
今日、合、点、あり、尤、ある、と、あり、謠、伝、る、わ、ど、の、者、も、只、今、子  
て、あ、き、と、と、お、の、を、る、と、あり、逸、し、り、お、と、ふ、小、謠、曲、の、作、乃  
山姥、を、一、休、祥、師、の、よ、く、い、傳、く、る、此、外、他、者、も、と、く、と、評、  
あ、く、母、と、謠、抄、ま、く、松、要、抄、等、の、注、釋、を、る、子、く、り、を、の、者、  
此、他、と、い、お、の、を、れ、す、多、く、ハ、学、才、博、識、の、僧、を、ど、此、他、あ、く、

岡本半助

○二條北町城の清普法あり上方の普法大名小御付、れ諸、  
より、半、助、此、者、人、教、と、曰、く、集、め、く、上、京、せ、く、井、伊、家、あり  
本、半、助、半、助、を、初、く、ま、折、節、夏、の、事、あ、る、小、麻、末、あ、る、惟  
子の、洗、ひ、を、げ、と、ろ、く、破、れ、く、半、助、着、用、せ、く、右、岡、本、よ  
里、此、を、初、の、面、と、と、せ、く、諸、家、の、と、此、ま、く、も、笑、ひ、と、さ、小  
つ、く、い、半、助、事、あり、と、構、ひ、お、く、出、懐、く、て、諸、士、と、ま、ま、く  
と、初、義、他、法、格、別、ふ、て、あり、く、と、さ、く、く、の、普、法、場、子、我  
お、と、ら、く、と、大、ある、石、を、作、山、子、積、お、き、と、と、こ、ろ、井、伊、家、の、  
小、屋、場、子、ハ、小、き、石、の、ま、あ、り、あ、り、本、多、家、と、さ、り、合、あり  
し、お、と、も、内、の、沙、汰、も、あ、り、く、と、さ、れ、也、あ、り、や、本、多、家、子、ハ、殊

子大なる石多くよせてこれありふ井伊家の方小石おれが  
見たりとて入るえりさきく追々石とを揃ひ多く土基の根石と  
居ふとて入りしより何れの子を造らざるう勝北なる大石ありと列  
よせられしとて入るえりさきく日と登りしより石とすゑる子も一同  
子すゑるよりすゆをうねて系伏見色色の材木と下並小買を造  
て時小のそとく橋の中子作山子あありへる此上子石と居  
させたるほど小るれま根石よりすゑるより外ある場ありと  
ありハ材木少くて泥の中へ根石埋まり幾交も根石をす  
ゑ並しこの外隙入り費用を多くめりしとてこゝろ半助傷  
きあて半廻りよく材木を多くめりしとてやうおれどもより  
て費せし人小先ちくる居しとて終りしとてハ難もく

存じたるころふけこも材木と買あがると容易うくばるれ上りの  
幸小変更あき人を何れも坊明うぬ人よりあてはありゆかり  
半助を武造のこあうす手流も人子勝北丸世子ハ移しき  
能書と海世あも貴きこの文は普濟寺形もをいしゆの  
あうりやうすいしとてあひたりしも海子ま人の手本ありと  
ていしととぞひ草

慈光寺

○武蔵國河城城より北の方約十里を行く比企郡子入り岩殿  
山觀音園といふ精舎あり巖と鑿用きしを礎とて堂と  
まじりて北の山老松の繁茂する森とてく教里子あるま  
とふこ此修禪の聖地とてふア一此地より及程数里ありて九折

坂とつり山と鏡りて踏あり人衣いやく希あり又赤山の平  
とるく小平村とつり邑里ありここ善光寺あり麓小山五  
権現の祠あり赤坂而護法神あり女人事此傍の形とつり  
小坂北峻きとつりんうとあぐ杖とたよりありてやろく登り  
て終迦堂子画る指又救十歩とつり一の櫛戸ありこれ三ろ  
より女人禁制あり本堂子ハ宝量寺佛と安坐す及び僧房  
の家造りも古制と存して見ごころありとつり此彼荒廢  
たる絶頂子より大無周よりうち眺臨子煙樹の渺茫とつり  
遠山の彩と見ゆる景色色々々如く比るまじ境小くそあり  
る道成律師草創の寺あり道成を監真和上の弟子とつり  
持戒精進こと小道終此潔きとつり師の監真もる此持とつり

一々持戒第一とつり謂まらるるそ関東四衆の仰き慕ふと佛  
陀の如くありとつり謚と廣慧菩薩とつり道跡の詳ありハ元亨釋  
書本朝高僧傳子とつりさて祖塔を竹藪中子あり廟堂を  
横景一丈あり中小二重の木浮圖と置きとつり終蔵子古經と  
多く蔵す紺紙金泥の妙法華および周統の二經あり傳つり  
法和天皇宸極とつりそ此外金字妙經教十部何れもそ生  
頃の續神代書と見ごころ又古馬の大般若經あり毎卷跋文字  
貞觀十二年歲次辛卯三月檀主前上野國權大月澄六位下安  
儀朝臣小水麻呂とありこれ人の傳記考文とつりそその年紀と  
按ずると己子千年子とつり猶一切經の殘りもる多しとつり卒爾小  
こまて周すふその中般若空持阿舍等の文ありとつりそ乃

歴時と數々ありしに此唐蔵の經文ありてあふし末蔵元蔵の  
經より今も存するものハ三つ希あるものハ此唐蔵ハ最珍  
きものありて欠奉ありて傳へ残るると真に惜むべし  
るありあはれ精舎の今まさ小荒廢するを嘆く  
まハ西教寺駒山りの地ハ遊歴のこき此記あり

宋版此經跋

○冷泉為氏卿下野國子下王<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>附<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>宇都宮<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>於<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>綱の家子<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>あはれ  
寓居せしれしとのありしを此の<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>打<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>安子<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>新和歌集といふ  
このありしの中<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>小<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>唐島<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>此社あり唐本一切經供養一傳  
る附日ころを雨やまぐ<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>傳り<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>るる<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>と<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>空<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>を<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>れ<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>る<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>こと  
あはれ供養に<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>け<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>ぬ<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>るとして<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>端書ありて<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>為氏卿の<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>子

今<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>より<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>や<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>ころ<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>此<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>や<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>も<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>晴<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>ぬ<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>らん<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>非<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>世<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>の<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>月<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>此<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>影<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>と<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>う<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>と<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>く<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>  
返

あそや<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>や<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>る<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>神<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>世<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>の<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>月<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>此<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>あ<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>つ<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>ま<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>て<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>ん<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>乃<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>や<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>ま<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>は<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>ら<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>そ<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>を<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>れ<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>ぬ<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>る<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>  
こ<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>あり<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>こ<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>の<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>唐<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>島<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>社<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>蔵<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>あり<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>末<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>蔵<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>の<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>經<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>奉<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>世<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>子<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>散<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>逸<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>す<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>今<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>希<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>子<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>  
る<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>と<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>ころ<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>あり<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>を<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>此<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>跋<sub>（北に冷泉為氏卿ありしを記す）</sub>子

奉渡唐本一切經内

建長三年正月九日於唐島社遂供養

常例  
前長閑後五位行藤原朝臣時朝  
筆筒

この時朝ときともとのふハ常陸ひまのくに公坐間のりまの城ままあり五妻あがま後子ご文永二年ぶんえい  
二月九日ふたつきにゅうじつ巳酉しゆう刻坐間前長門守のりまのまへながと後五位下のちご藤原朝臣ふじわらのあそん時朝ときとも永承六年えいじやう  
十三じゅうさんと又またるるる墳墓かたづの坐間のりま此こゝ探嚴寺たんげんじありは號あやうと晏翁えんわう海うみ  
公大居士こうだいこしととり

因よ子こ云い末叔すえしやく嚴經げんぎやうの聖せい卒そつととありととるる此こゝの三聖さんせいとと卒そつ  
建長けんぢやうも卒そつるるの叔しやくいづれいづれを因よ子こととるる青あお方かた回まわ全ぜん齋さいとと卒そつ板いたの  
發論はつろん波羅密はらみつ此こゝ密字みつじの虫むしと虫むしとと伝でん證しやうすすアアととりり本儀ほんぎ

提て醒せい紀談きだん卷一くわんいち



關弘道せきひろみち道みち枝え



金かね基もと  
中ちゆう二に年ねん



